



東北地方における縄文後・晩期の低湿地遺跡

小久保 拓也（八戸市教育委員会）

低湿地遺跡とその立地 「低湿地」とは、沖積平野などの低地に形成された湿地を指し、「低湿地遺跡」とは、主要遺構そのものが低湿地内部の微高地や帯水域に存在する場合、特にその遺跡を指す（那須・市原1979）と提案されているが、現状では遺跡の沢などの一部分を指して「低湿地遺跡」や「泥炭層遺跡」と包括的に呼称している場合が多い。東北地方の縄文後・晩期では13遺跡が確認されているが、いずれも相対的な低地ではなく、湿潤な環境に遺構・遺物が検出された「低湿地遺跡」と捉えられており、「低湿地集落」は発見されていない。

発見される遺構と遺物 埋没してからの遺跡の環境変化は地下水などにより非常に緩やかであり、ほとんどの遺跡で検出される「捨て場」からは、大量の土器とともに植物質の遺物や食料残滓が良好な状態で発見されている。また、土壌には昆虫や種実・花粉などが保存されているため、植生を含めた遺跡環境を考えることができる。生業に関連する遺構としては、是川中居（青森）・柏子所・上谷地（秋田）・高瀬山（山形）から水さらし場遺構が検出されており、萩内（岩手）からは漁撈施設と考えられるエリ状遺構のほか、階段状の木組み遺構、足跡などが検出されている。

東北地方の低湿地遺跡に見られる生業活動 是川中居・山王田（宮城）・荒屋敷（秋田）では植物珪酸体分析や種実分析を行っている。是川中居の分析では栽培種の可能性のあるゴボウやヒエを検出しているが、いずれも量では堅果類には遠く及ばない。東北地方で近年発見が相次いでいる水さらし場遺構はトチのアク抜き施設であり、施設を使いトチを大量に処理していたことを示している。以上の点から東北地方においては縄文時代の生業の核である狩猟・漁撈・採集活動への重点の置き方は大きく、後・晩期での栽培や農耕への変化は少なかったようである。

是川中居遺跡 是川中居は低湿地調査の先駆けとなった遺跡であり、近年、史跡整備に向けて本格的な調査が行われている。「特殊泥炭層」があるとされていた地点は沢地形であり、捨て場が形成されていることが明らかになった。また、沢を埋めているのは泥炭層ではなく食料残滓などによる植物遺体屑層であり、捨て場からはヤス軸3本・弓・掘り棒の5本が束ねられた状態で出土したほか、建築部材や樹皮製の大型漆塗り容器などが見つかった。その下の砂層からは、水さらし場など多用途の木組み遺構を検出した。さらに遺構下部から板材と礫が出土しており、作り替えをしていたと考えられる。

低湿地遺跡の保存・活用 花粉・種子分析を含め、生業の復元という視点での調査は不十分であり、今後も同様の調査が継続されていく必要がある。また、出土する木・樹皮・蔓を材料とした植物質遺物は新発見のものも多く、土器・石器を中心に想定されていた生業活動を大きく補強するものである。栽培・農耕への変化だけに捉われず、新発見の植物質遺物と合わせて生業活動の検討をしていく必要があろう。低湿地遺跡の調査は特別な方法や費用が必要であり、相当の準備が必要である。さらに史跡整備では貴重な情報を持っている低湿地遺跡の水源などを含めた環境調査を行い保存していく必要があるが、同時に教育普及の要望にどう答えるかが課題となっている。また植物質遺物の保存処理は永久なものではなく、処理後は継続的な経過観察が必要であり、処理・保管過程などを記したカルテ作成が望ましい。

《参考文献》那須孝悌・市原壽文 1979 「「低湿地遺跡」および関連する用語の定義について」 考古学研究119

是川中居遺跡(青森県)

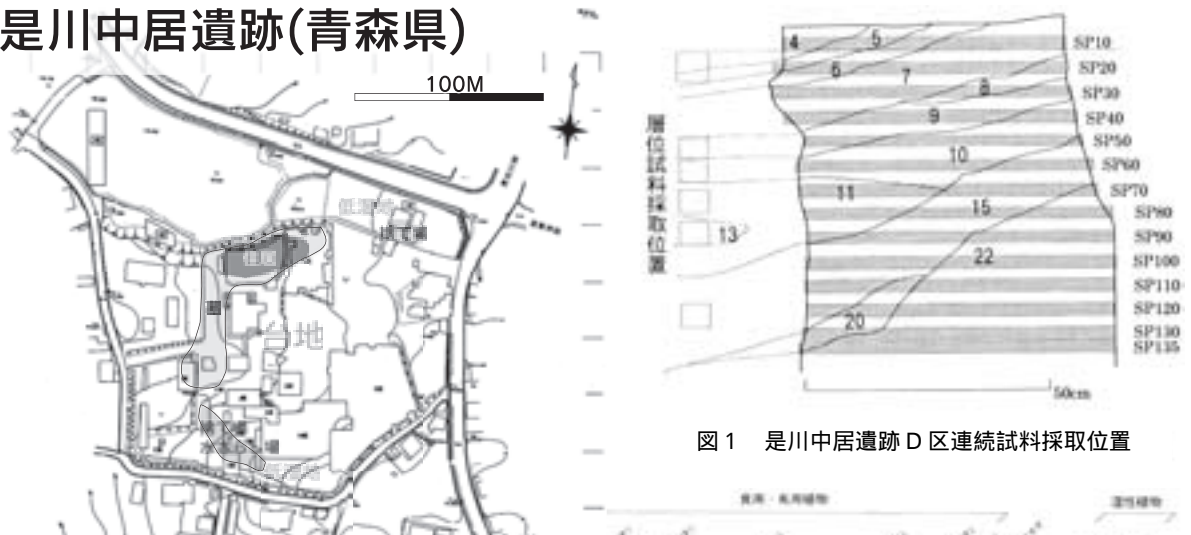


図1 是川中居遺跡D区連続試料採取位置

D区の種実分析について

D区ではクルミ・トチ・ヤマグワ・ニワトコなどが目立つが、ヒエは非常に少ない。クリは花粉のみ大量に検出している。

遺跡北側の長田沢1区(晩期中葉)からイネ類が2点検出されているが、検出した土層は、地すべりによる不整合を示す部分があり、弥生時代以降の堆積層と考えている。

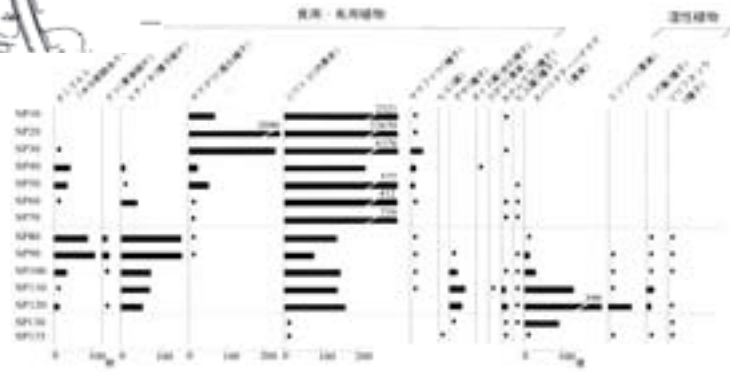
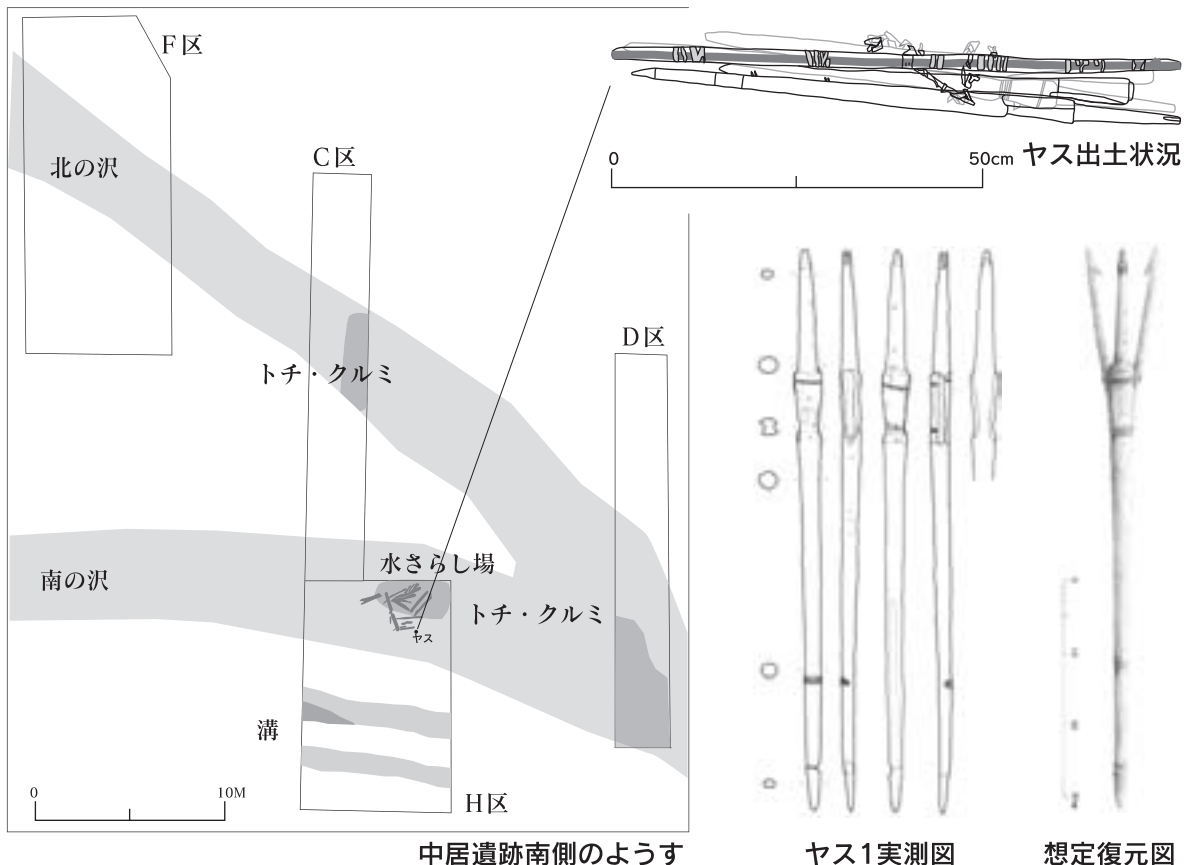


図2 是川中居遺跡D区の主要大型植物化石変遷図

(表示個数は12.5リットル中に含まれていた種子総数、黒丸印は10個未満)



中居遺跡南側のようなす

ヤス1実測図

想定復元図

